

## ヴォラールとセザンヌの財政的連携

—1895年の展覧会を中心に

野村敦子（京都大学）

---

アンブロワーズ・ヴォラール（Ambroise Vollard, 1866-1939）は、19世紀末から20世紀初頭のフランスにおける最も重要な画商のひとりである。同時代の作品を積極的に扱う独立的な画商として、当時を代表する多くの画家の作品流通に関わった。とりわけセザンヌに関しては、それまであまり知られていなかったこの画家を精力的に売り出し、セザンヌ作品の経済的価値と美術界における評価を大幅に上昇させ、画家の生存中はその作品の取り扱い画商として当時の美術市場で特権的な立場を築いた。

美術史においてヴォラールの果たした役割は、美術史家ジョン・リウールドによるセザンヌ論を始めとして、従来個別の芸術家の研究の中で参照されてきた。しかし、2007年にオルセー美術館で行われた『セザンヌからピカソまで—ヴォラール画廊の傑作』展をきっかけに、ヴォラール自身に対する再評価の動きが高まった。ヴォラールの画廊から世に出た絵画を集結させたこの展覧会では、この画商の鑑定眼の鋭さが浮き彫りとなり、ヴォラールの直感や大胆さ、先見性が評価された。一方で、作品制作と市場を媒介する画商としての商業的側面についての考察は、これまでの先行研究で充分になされているとは言い難い。本発表は、パリの国立美術館中央図書館での調査に基づき、ヴォラールの遺した帳簿や回想録を手掛かりに議論を展開する。そして彼の画商としての活動の様子が典型的に現れているセザンヌとの関係に注目し、1895年のセザンヌの展覧会を中心として、ヴォラールとセザンヌの関係を財政的な観点から明らかにすることを本発表の目的とする。

発表ではまず、当該の展覧会前後の時期を含む一定期間における購入記録と販売記録を、ヴォラールの帳簿に基づいて整理する。このヴォラールの帳簿の紹介は、我が国ではこれまでほとんど行われていない。併せて、この展覧会に来訪した批評家や画家による展覧会評を検討し、セザンヌ初めての個展が当時どのように受け止められ、その後のヴォラールの画商業にどのように影響したかについて考察する。また、展覧会開催から翌年末までのセザンヌへの支払履歴の分析から、画商と画家の間に一定の財政的な取り決めがあった可能性を提示する。ヴォラールは当初委託販売でセザンヌの絵画の取り扱いを開始したが、展覧会終盤には展示作品の買取が行われていたと予想される。以後画商として一躍名を上げたヴォラールは、「市場価格のコントロール」「画家の評判の確立」「蒐集家や批評家との交流の維持」などを戦略として用いるが、それらのうち「市場価格のコントロール」の戦略がこの1895年の展覧会ですでに現れている。当時の帳簿や回想録からは、独立したばかりの若き画商であったヴォラールが、セザンヌ作品の取り扱いによって美術市場の特質を学び利用していった様子を窺い知ることができる。